

江戸堂上派和歌資料考

— 亨弁と石野広通 —

松野陽一

要旨 江戸堂上派武家歌壇資料の紹介整備に関しては従来とも意を用いてきたが、学統図『関東歌道系伝』の二条系、冷泉系それぞれの最有力歌人たる亨弁、石野広通については、『江戸堂上派歌人資料 習古庵亨辨著作集』（新典社 昭55）以下『著作集』と略称）、『霞関集』（古典文庫 昭57）の両解題に補訂の必要が生じてきているので、その後管見に入つたところを報告しておきたい。

一、亨弁

(一)、家集 招嘲集

従来は『著作集』で紹介、翻刻した、八戸南部家本のA・B二本のみが知られていたが、近時、国文学研究資料館の所有となった石野家本⁽²⁾に一冊の伝本(B52・45)が見出され、内容から様々な新事実が判明したので、この本の紹介から始めることとした。

書誌を簡略に記すと、二二・二×一四・一センチの袋綴一冊本。縹色の無地紙表紙の左肩に「亨弁和歌集」と外題が打つけ書き。内題はない。楮紙五九丁、遊紙前後各一丁、本文一面一一行、一首一行書き、歌題は歌頭に記されている。奥書は無い。歌集(第一丁〜四二丁)、萩の名残・身延旅日記(冒頭に駿河竜華寺十二景和歌并序が連接している。第四三丁〜五八丁)、辞世歌・偈(第五九丁)の三部分で構成されている。

歌集本文は、八戸本と比較すると、かなりの異同のあることが判明する。

春・夏・秋・冬・恋・雑・釈教の部類の在ることは明白だが、部立名は記されていない。歌順異同が極めて多いほか、歌の有無は次の如くなっている。八戸本を基準として、Xは石野本にのみ見える歌、Yは石野本に欠けている歌の数である。

		X	Y
春	158首	2	6
夏	119	4	3

秋	163	2	6
冬	119	0	4
恋	122	0	0
雑	103	1	13
积教	47	0	20

一見して雑、积教に異同の多いことが知られよう。

雑部は、南部家本でいうと歌題配列の71「寄榊神祇」までで、以下巻末の72～784の13首が石野家本では欠けている。

772 仙台領主吉村の七十賀歌

774 松平康棟勸進和歌

777～781 南部家慈照院殿追善五首

といった、単なる歌題歌ではない、人物、歌会に関係する歌群が無いということになる。

积教部では、石野家本では、巻頭の歌題歌群①785～792の8首に、宝暦四年烏丸前内府七回忌十如是歌③811～829の19首（830欠）が附されるという単純な構成（27首）になっているのに対し、南部家本は巻頭歌題歌群①と③十如是歌の後に④巻末1首（其中衆生悉是吾子）が添えられるという構成になっている。

雑部・积教部共に、石野家本が歌題歌中心の小さく整理された配列に対し、南部家本はその歌題歌群に、機会歌、歌会歌付加の広い集成を見せる構成という対称性がうかがえる。

四季部の歌の有無の異同は小さいが恋部を含めて歌順の異同は大きく、且つ、注目すべきは、石野家本で歌題配列に位置づけられていた歌が、南部家本では巻末にまとめられているという現象で、

春 151 遠柳、152 雉子、154 元日、155 社頭梅、156 春暁、157 磯春草 (6 首)

夏 275 夏声、276 林新樹 (2 首)

秋 433 原鹿、434 月前鴈、435 対月忍昔、436 驕中鴈、437 波上月、438 古寺月、439 旅店聞虫、440 草花 (8 首)

冬 558 冬山家、559 歳暮松 (2 首)

恋 680 久恋、681 秋恋 (2 首)

がそれである。言つて見れば、南部家本では「切出歌」が巻末にまとめて記載されているという姿と理解されるのである。

前の雑、釈教の現象と合せると、石野家本は草稿段階の姿 (十如是歌の欠脱歌、秋巻頭立秋題の欠脱歌から推測されるように、不完全な本文の伝本である) を示すもの、南部家本は配列を再構成した再草稿段階 (切出歌が各巻末にまとめて記載されるように、これまた定稿本ではない) を示すもの、と考えておきたい。

駿河竜華寺十二景和歌、萩の名残・身延旅日記は、南部家本と比較すると、字句の異同にとどまり、大きな本文異同はない。その点、「身延教報」(34・4。昭和一六年四月) に載つた、谷義一氏本 (亨弁自筆本という?) が熱海の辺で大きな異文があるのとは違いがある。

辞世歌、偈の巻末補記は大変注目される資料である。それは、生年が初めて判明し、没年令が確定する資料である故である。本文を示す。

辞世

亨弁

老の坂こゆるもいと、くるしきをいさかへりなんもとのすみかへ

病中に朝顔の花を愛しみて身のおほりも遠からざらんことをおもひてよめる

きえぬべき露の命も朝顔の日影まつまのたくひなるらし

茲^三六十七歳 元禄二^四九月十三夜ノ生レ也

生者必滅詎可出乎、故每歲初春逆記於没後遺事、又以其日擬終焉之時、述野

偈一章

法住院日義

真如巨海本湛然 妄想波高七十年

擾々悲歎今日休 妙心融処浪三千

荆谿日亡浪三千 假立空称云云

以上である。辞世の「老の坂」、病中の「きえぬべき」は、八戸南部家本『新歌題聚』に収録されており、『著作集』に翻刻しておいた。しかし、生年を元禄二年九月十三夜とし、没年令を六十七歳とするのは新資料である。「著作集」では五十歳前後かと推測していたから、これは驚きであった。活動歴はかなり大きく組み直さねばならない。身延旅行は五九歳、和歌童翫抄草稿本の執筆は六一歳、同版本は六六歳ということになる。旅行で頻りに馬に乗りたがった理由がわかるというものである。

(二)、歌学 和歌童翫抄

『著作集』では諸伝本を①略本(草稿本)、②広本(完稿本)の二系に分け、①を更に甲乙両類に分類した。その後かなりの伝本が管見に入り、架蔵に加わったものも多いが、伝本分類は変更しないであろうである。

①略本(著者名小釈亨弁) 写本

② 広本 (著者名通危子) 版本

もそのままであるが、①の善本を入手したので、紹介したい。

二一・七×一三・六センチの袋綴五穴一冊本。菊花・萩の型捺に、薄墨、青墨 緑灰の雲霞横縞文様の紙表紙の中央に白短冊題簽を貼り、外題は「童翫抄」。内題、序題は共に「和歌童翫抄」。料紙は楮紙で二〇丁、遊紙前後各一丁。本文一面七行、一首二行書き、奥書はないが、裏表紙見返しに「盛岡藩 大村氏」の所蔵記がある。江戸藩邸在住者であろうか。書写年時は不明だが、享年没年の宝暦五年前後であろうか。精写されている。印記は、巻頭第一丁右肩に朱方印二行「彩月藏書」。注目すべきは序で、寛延二年十月と明記されているのは他本に見えない。

此小冊は和歌に心ざしある兒などのたま〜よみ出る哥に、てにをはちがひをつゞり、書出す詠草に、かなちがひのあまたはべることのいとをしさに、大かたの人のしれる事を、三十一字につらね、さるともがらのそらんじ覚るたすけにもなりねかしとなり。おとなめきたる事はをのれもわきまへ侍らぬにこそ。名付て和歌童翫抄と云ものならし。寛延ふたつとし、神無月廿日あまり、むさしの、かたほとり、麻布といへる所の草庵にて毫を弄す

さしやうからん
小釋亨辨

*……南部家本・九大本とは異文。

——独自異文

点線部は版本を含めて異同のある部分だが実線部分は他の三系統のいずれにもない。特に執筆年時、寛延二年十月廿日は、最晩年の版本刊行の五年前になるのが注目される。この後、大病したのが、版本の「通危子」の名に反映していると思われる、実線部「むさしの、かたほとり麻布といへる所の草庵」も版本の「武陽麻布隠士」に関わっている

と見てよからう。とすると草稿本三本間の本文異同の位置づけに関係してこよう。流布本に近接していると見てよいだろうか。諸本との本文異同を『著作集』の二ヶ所についてあげると、

①五音五位（五十音図）の部分、

此五音五位に豎横のかよひあり。たとへば、公はきみなり。公任をきんたふとよむは、まみむめもの豎のかよひ也。魚にうほ、いほのよみあるも、あいうえをの豎のかよひ也。又、むめと書てうめとよむは、うくすつぬふむゆるうの横のかよひ也。家、いへとかきていゑとよむは、ゑけせねへめえゑの横のかよひなり。

とあつて、これは九大本に近く、八戸本からはかなり遠い。版本は末尾に更に増量がある。

②「ぞるこそれ」の説明文

「ぞる」とは「そ」といふては「る」と留也。雪そふりけるの類也。

「こそれ」とは「こそ」と云ては「れ」と留也。名こそおしけれの類也。

とあつて、これは「ぞるこそれ」と書き出す八戸南部家本よりは、「ぞる」とは、「こそれ」とは「と掲出する部分が九大本に近いが、用例が一例だけの点では、二例の九大本より八戸本に近い。八戸↓松野↓九大と考えれば合理的な説明はつく。（①五音五位も同様）。ただし、その他全般にわたつての異同はかなり大きく、特に「追加」の部分では、八戸本と九大本が比較的近く、流布版本が大きく異なることは知られていたが、松野本は前者に近いものの、用法の順序・用例はかなり異同があつて、今後の検討に俟たねばならぬ点が多い。この「追加」の末尾に、「ず」と「づ」、「ぢ」と「じ」の使い分けの項（八戸本・九大本は「ぢじ」「ずづ」の順）があつて、

一、ずづのかなの事

ず^ハ 数^{カサ} 鈴^サ 葛^ク 疵^キ 鵬^モ 藻屑^{モクサ}

づハ 水みづ 賤しつ 鶴たつ 先まつ 譲ゆつる 愛めつる 閉とつる

一、ぢじのかなの事

ぢハ 楫かぢの舟 梶かぢの葉 榻しぢの車 藤かぢ 恥はぢ 閉とぢ 紅葉もぢ 戻摺もぢすり 氏ぢ

じハ 櫛はぢの粗葉 短みぢかし 雉きし 五十年いそし 虹にじ 鯢くしら

となつていて、順序は異なるが、用例は九大本にほとんど重なっている。

更に卷末は

一、いのかなもこゑには下に用ゆ、よみには上に用ゆ

ていかこま世
定家よま世
さいいへ

一、ひのかよひ

淋しみ あはれみ かなしひ

一、ふのかよひ

けふり あはれふ かなしふ

一、ふほのかよひ

葵あふひ 仰あふく

で終っている。これらは、八戸本・九大本・流布版本を通じて欠けている部分であり、草稿段階で、掲出項目にかなり出入があったことを示しているよう。草稿段階の伝本はまだ相当数存在していると思われるので、その出現を待って、本文のゆれを見定めて行く必要があるろう。

版本について一言。『著作集』にb、iの八種とその写本(j)、k掌中版をあげたが、この分類に変更はない。b大坂屋平三郎版(初版本)、e大坂屋平三郎・西村清蔵合梓版、j版本の写本、k掌中版(ただし、英平吉版)の各一点が架蔵になった。なお、浅田徹氏本(序・本文は版本の写しだが、「制之詞」43句が付加されている。亨弁、服部玄通(伊藤松軒門)に触れる文化十年十月の君寿識語あり)の貼紙に

東都二条家伝

蓮阿 元禄ノ比ノ人、祐天寺ニ墓アリ

亨辨和尚 麻布桜田丁目蓮宗
住持也 蓮阿ニ字フ

伊藤松軒 麻布竜土辺ニ住

服部玄通 赤羽住医師 松軒ニ字 有橋川様ノ御門弟也

北沢久興 竜土辺 与力 松軒ニ字フ

という注目すべき注記がある。『関東歌道系伝』同様、伊藤松軒系歌人(前記文化十年識語の君寿か、貼紙に見える「文化十五とらのとし弥生讓受」と記す「滋野昌大」なる人物か)の書入れであると判断される。最も注目されるのは連阿(蓮阿に誤る)の「祐天寺ニ墓アリ」の条で、まだ確認していないが、亨弁の師連阿の不明部分の解明に役立つところあらばと願っている。

(三)、その他

歌学書の『再治視聴筆削』写二冊が架蔵に入ったが、『著作集』に翻刻した静嘉堂本と同系統で本文に異同がほと

んどのないので、ここで扱ふこととする。

静嘉堂本は、松平大隅守玄圃入道乗友本を書写した由の、天保十一初秋の田代正容の識語があるが、本書の識語も

右此書者故松平大隅守玄圃入道乗友

朝臣所藏之書也云々、有故而是安政六

未載写之者也

正賢（花押）

とあり、玄圃入道乗友本に拠つて書写していることが知られる。前記の如く、本文が殆ど一致、特に他の伝本（八戸本、東北大本）に無い目録があつて、これも一致することから、識語の内容は信じられることになる。なお、玄圃は「関東歌道系伝」によれば、伊藤松軒門。前記浅田本和歌童歌抄の「東都二条家伝」の人々に近い、つまり、書籍所蔵圏の近いことが推測される。

以上、三点によつて、享弁の著作の成立事情についてかなり手懸りを得ることができたが、また、その伝来、書写に、享弁門弟の伊藤松軒系の人脈が寄与していることがうかがえたえように思う。

二、石野広通

広通の著作を検討する場合、根本資料となるのは、孫の広礼の「閑斎随筆」（狩野文庫蔵）所収の「蹄溪翁著述書籍目録」（以下「目録」と略称）である。「霞関集」（古典文庫）の解題に翻刻し、その後それぞれの伝本集成に努めたが、まだかなりの準備が必要なので、本稿では二点のみを紹介し、一種の呼び水とした。

(一)、連歌 延年観再点連歌

「目録」に「連芦集 一卷 連歌草稿」と見える。これと同一書か否かは不明ながら、「広通家集」の外題のある広通自筆連歌集を入手したので紹介したい。

一七・六×二五・五センチの横本、袋綴一冊本で、打曇り斐紙表紙。左肩に打つけ書きで、「廣通家集」と自筆外題がある。内題は「延年観再点連歌」とある。以下、奥書に到るまで全て自筆である（巻末に朱筆で明治四十三年七月の弥富破摩雄氏の識語がある）。料紙は薄様で、一四丁、遊紙前一丁。本文一面一六行。前句は一字半下り、時折記される詞書は、前句と同じ高さに記されている。「春連句」の見出しで、以下、春、夏、秋、冬、恋、雑の部立で「附合」が百句、次いで「発句」が六面に三六句記されている。奥書は三種、

① 右四季恋雜附合百句、発句三十

六総計百三十六句、阪昌周合点

或者一席一覽之句也

廣通

② 右句々反復整覽、可謂詞花

錦繡矣、就中抜群者八十三句

叩加点、聊報于盃意、呵々

昌周判

明和七年六月中浣

③右一卷者延年観昌周師再点奉り

合点添削奥書等、本書のまゝに写して

かしこにつかはす、永く此道のちきりを

持せんためなり

明和七年十一月

廣通

とある。阪昌周は幕府御用連歌師。延年観は号。『源氏演説抄』などによつて、廣通と交友が深かつたことが知られる。無論、連歌に関しては師の礼をとつたのである。本集でも昌周家句会にしばしば出席、廣通家会に昌周が出ていたことも知られる。合点は、

春一六句中 八句

夏九句中 四句

秋一四句中 一〇句

冬一〇句中 六句

恋二八句中 一七句 再点二句

雑二三句中 一二句

発句三六句中 二六句 再点一句

このうち再点のみを例示しておく。

(恋)

恋しくなるは何の心ぞ

待かひもなきを習ひの夕く（句頭右肩に二行の掛点）

月次のまへ句に

よし恋しねと人やつれなき

おなし世にあるこそせめて契なれ（句頭右肩に二行の掛点）

（発句）

おなし年の九月十三夜に

たくひなしと見し夜やたくひけふの月

奥書に見える添削は四句ある。一句のみ上げる。

（冬）

われにしも草葉につけてわすれめや

人目き
さひしさまさる冬の山里

このような合点、添削のあることから、「目録」の「連苧集 一卷 連歌草稿」（卷子本であろう）、との関連は深いと推定される。本集の内容は、宝暦と明和の年号が見られ、明和七年は、広通五三歳御納戸頭の時であり、八三歳の生涯を送った人物であるので、中年迄の作品が収載されるに過ぎないが、一応右草稿と見ておくこととする。

印記は扉紙に「濱雄／蔵書」朱方印、巻頭に「はまを」朱方印、「米山／中之／右図／左虫」四行横長方朱印の三顆、巻末に「月明荘」印がある。一、二は弥富氏蔵書印。三は不詳。反町弘文荘から出たものである。

広通の連歌は、表現密度の濃い和歌に比すと、特に四季句、発句は類型的発想のものが多く、魅力に乏しいが、

恋・雑句には見るべきものが少なくない。本集は広通の表現世界を評価する際の看過し得ない資料であるのみならず、研究のほとんど進んでいない公儀連歌壇の資料としても今後注目されて行くこととなろう。

(二)、画論 絵そらごと

該書には、伝本に静嘉堂本があり、燕石十種^三にはそれを底本とした翻刻があり、日本画論大観にも入っていて既に活字版で知られる作品であるが、紹介されていない序を持つ伝本が書架に入ったので紹介しておくこととしたい。

二六×一八・五センチの袋綴一冊本で、表紙は布目地に丁字の刷毛格子引き、題簽剥離のため外題はない。内題は「絵空言」。料紙は楮紙で墨付三三丁、序、本文共に一面一〇行。寛政頃の写本である。奥書、印記はない。扉紙左肩に「中原遠江守石野広通作／絵空こと」と記されている。

本文は、静嘉堂本即ち活字本とほとんど異同はないが、広通自序が付されているので、以下にそれを示す。

(序)

常に人のよくいふ事なれども、そら事書は絵の風流故実にて侍るべし。詩歌は有声の画也。図画は無声の詩歌也。唐詩の白髮三千丈、和歌の鶯のこほれる涙、みなこれ幽玄の秀作とし、雪中の芭蕉は摩詰が無双の画才と称せり。八景といへるも、瀟湘・洞庭は他名^地なれども、平沙・遠浦・山市・江天・煙寺・漁村みな虚景也。詩歌の感応は暫く他書に譲る。丹青の妙ある所、漢相同じ。北齊の楊子と白馬を壁に絵書く、毎夕心長鳴くて水草をもとむるが如しと李嗣真が^一画品に見え、金岡が画ける馬、夜なく放て近辺の田畑を喰ひしよし、古今著聞集にします。浅草観世音の□絵の馬も放れて草をくらへると世に語り伝ふ。張僧餘が絵の竜は雷雨晦冥^{フクメイ}して天にのぼり、常則

が書たる獅子は犬イヌへ、にらみ、威光が書たる鶏はまことの鶏見て、是を蹴る。高孝行が画の鷹、諸鳥はるかに見
て驚き恐れける事、唐、倭同日の談也。絵にかける女を見ていたづらに心をうごかすが如しとは、僧正遍照の歌の
さまに、古今の序にはたとへたるを、さるためしも侍るをや。勝説に、進士趙顔といふもの、画土の所にて、軟
障シヤウに一人を画するを得て、はなはだうるはしきに、かかる女を得まくおもふ。絵かける人のいはく、われは神
画也。此名は真こといふ。其名を呼て百日やまずは必応ぜん。応ぜば百家の綵灰酒サイを是にそ、げ。則活ん、と。顔
其言の如くす。はたして障を下り、言笑飲食つねの如く、年をこえて一子をうむ。其友の曰、これ妖也。余、神劍
あり。是をされ。此ゆふべ真ら位て曰、妄は南嶽の地仙也。君にうたがはれ、さらにとゞまるべからず。其子を携
て軟障にのほり、前酒をはき出す。其障を見れば、一子を添、みな是絵也と。雅筵醉狂集正親町一位公通公の歌の
自2才住マに書れたり。行暮てふるき宮居にやどりたるに、掛絵マどもあまたあるを見て、いねぶりたる時の間に、
夢うつ、ともなく聞侍る事を書つゝけて、雨夜の目ざましとするものならし。

以上である。

(三)、その他

広通は著作だけでも六〇部あるので、諸本調査も容易ではないが、それ以外の関連資料にも目を拡げておかねばな
らない。ここでは編纂物、古典研究のための索引類に触れておく。

(1) 師冷泉為村歌集

国書総目録に「冷泉為村卿詠作類聚」二一冊。石野広通、越佐名家著述目録」が掲出されている。石野家本の
『止静院殿御藻』（B52・166）一七冊、石野広通編がこれに当ると思われる。現状は一八冊以下を欠くが、第一冊に後記

の如き全体の目録があり、第二〇冊まで記されているので、二一冊との差はあるが、石野家本は全て同一装丁で、広通自筆の序があるので、間違いなく、これが原本であると断定しておく。

該本は二一・五×一三・九センチの袋綴一七冊本で、表紙は藍地白抜き麻葉文様で全冊を通して綴じ糸も紫色の袋綴本。料紙は良質の楮紙。一面八〜五行、二筆の取合本で、序の内容と勘案すると、為村の死の安永三年七月から程経ずして、広通が師追悼のために編纂したものであると思われる。巻末三冊を欠くので、奥書を知ることにはできない。なお、為村には、別編集の陽明本、内閣文庫本、書陵部本（門人鷹見保具編）の歌集がある。

広通序と目録を掲げておく。

入道大納言殿為村卿、法名止静院殿澄覚尊の御言の葉の数々、とをく関の東まで風のたよりにちりくるをかきあつめ侍れど、わかきおりよりつかへにひまなく、今はた六十の暮、京に至り、夕陽の返照心いそがはしければ、始末錯乱、年月前後のま、にて、人の手をさへかりてかさね置ぬ。よく見しらべて書あらため給はん人をまつ事にす。その目録ひだりのごとし

澤翁

止静院殿御藻

第一（112丁）

天満宮奉納和歌、関東下向の詠、紀伊殿庭の言葉、新玉津島十二首、石野広通に給ふ浦鶴の讀、当座十二首判のうた、不酔花、東六条遊覧の歌、病中大麻守護の歌、桑染絹の歌、光明真言置字、宝曆十二年十五夜中務宮贈答同宮の歌、同十三年十五夜、明和元年十五夜、同年十三夜、同二年十三夜、御代始御会門流講師のよろこび、二十首和歌、五十韻のうた、柿本神影をうつす住吉内部に給、花月庵四百年忌、石野広通に給ふうた、う

すのなか言葉、はなかつみ置字、詠草見えす置字、紅梅念珠、近江八景、了俊像讚、琵琶の銘、安永二年十五夜、柿本神像を置詞、忍性寺法談聴聞、百一歳の寿

第二 (71丁)

宝曆十一年十五夜并十三夜、三勝記、和歌七首、市の口すさひ、和歌六首、柳原殿追悼同墓前幽懷、信遍追悼同像讚、実岳卿初月忌、光栄公追悼、桜町院御追悼、七十賀大田道智に給ふ、八十賀柳陰にたまふ、熱田宮奉納五首、実岳卿三廻忌、洛陽三十三所順礼、花月庵御詠、交戒御詠、本卦試筆、明和四年十四夜十五夜十六夜、同年十三夜同閏十三夜、

第三 (32丁)

樵夫問答 宝暦元年四十歳

第四 (22丁)

嵯峨の日くらし

第五 (9丁)

車玉端書
奥書御追悼納経、おくなかうた

第六 (7丁)

星夕七夕吟 宝暦十年四十九歳

第七 (11丁)

いすかの吟 宝暦十一年五十歳

第八 (40丁)

明和三年十五夜二百五十首十三夜百六十首

第九（22丁）

明和六年同八年名月

第十（20丁）

福大明神社改造三十番神柿本法案哥

第十一（16丁）

賀庭答和之歌

第十二（7丁）

星夕七九作安永三年六十三歳
当月に薨

第十三（12丁）

十題百首

第十四（11丁）

内宮奉納百首

第十五（10丁）

重陽九十首

第十六（32丁）

紅葉百首

第十七（20丁）

堀川太郎次郎藤川百首

第十八 (欠)

三代十百首

第十九 (欠)

今出川御館勸進度々四通り

第二十 (欠)

松寿契千年長家卿七百同当日御手向
同卿御詠句題

松齡千年鶴

以上

序の「六十の暮」は、安永三年が広通の六十歳に当ることをいっている。詠作年時順に編集したことをいうが、第一、二冊が丁数からも、年序を変えている点からも、主歌集の位置づけになつていよう。「広通撰草稿」と序に謙辭を記すが、門人としての思い入れ深く、各所に注を添えている。第一冊目録末、並びに第一項天満宮奉納詠の跋文を引いて置く。

(目録末)

此冊、人の手をかりてしるす所に、下句をいさゝかひきく書り。清書の節かさねては 天満宮奉納、其外ともに、上下句相ならべて書べし。たゞし、置字の歌に至りては、下句を一字さげて書も見やすきため、しかるべし。こと更明和元年十五夜に三五夜中を上句にをき、こよひそ秋の歌の下句を、下句のはしめに置たるは、上句より下の句を一字さげてかくかたよろし。全篇、此意味を心得清書すべし。かさねて清書の時のため、しるす。

(天満宮奉納詠)

此奉納八百五十年を、ふるえの梅の御歌に見れば、宝曆二の頃にて侍るべし。さあらば、関東下向、新玉津島神主に給ふ歌の次に入べし、といへども、もとより年序にか、はらず、書よせぬるうへ、天満宮奉納なるがゆへに、巻のはじめに置侍るなり。

前者は、和歌の表記で、上下句を並べるか下句を下げるかを意識的に行なっている例、後者は、歌稿配列の編集意図を示す例、いずれも霞関集撰集方針の精緻さに通ずるものを感得することができる。

第一一冊の「賀筵答和和歌」は、明和八年七月為村の六十賀会を、広通邸で催した際の記録で、江戸の門人八人の寿歌各歌に対して為村の答歌、宴席後の当座二十題歌会の、非門人九人が加わった二十首に対しては「和」歌が京から戻ってきたものを豎紙に清書した、その控が本書である。広通序と答和歌各一組、出詠者の目録を記しておく。江戸冷泉派武家歌壇の様相のうかがえる資料である。

(序)

冷泉入道前大納言殿為村卿
法名道覚、今年明和八年六十の賀筵をひらかれ侍るよし、関東にもうけ給はり、門葉の人々こなたかなたより、歌よみて賀しまいらする中に、正安、茂里、法住、師道などいひあはせながら、広通つねに公務しげく、やうく日数へぬ。七月朔日つとめて、例のごと城にのほり、大樹を拝したてまつり、家にかへり、半日の閑を得たり。けふの健節、千秋のはじめとすべし。こゝに宗匠家の寿を賀せんがため、酒饌をまうけ、ことぶきよろこぶ。かねてよめるうた、正安、義里、広温、元典、法住、師道、勇子、広通ともに八人の詠草を取かさね、このよろこびにまいりあはれける人々と、もに、当座二十首の歌をよみ、今出川の御館にまいらす。か

の八人の外、非門の人九人あり。さいはいに他門にはあらず、道にきて広通が身をわかつとおぼし給はるべきよしを申入る。ことかく御点あり、每首に御歌をそへられ、西々にいはひものを贈らせ給ふ。あらためてこの歌ども、たけ一尺二寸ばかりの堅紙にかきつらねまいらすべきよし、永く納め置くべきむねをしめさる。広通すなはち、一筆にしるしてたてまつりぬ。師家の丁寧、今更にかたじけなく、よつてそのよしをはじめにしるし、入道殿の答和ともに、かの歌どもを書しるす事しかなり。

明和八年秋

広通

(寿歌 八首のうち)

入道前大納言家六十の御年満をことぶきたてまつりて

広通

和歌の浦や君か六十の老の浪

ちとせを松にかけてひさしき

答

老の浪ちとせをかくることのはのちきりかへてきわかのうら松

ちよう覚

(六十賀会当座二十首のうち)

入道前大納^{マツ}六十の御とし之をことぶき、広通が家に、さけさかなをまうくるの日、参会の人々の当座のうた

二十首

山霞

正安

はるの色はそれとばかりにしらかしの

葉山の梢かすむのどけさ

和

しらかしの葉山の梢きのふ見し

雪もそのまゝかすみそめけり

ちよう覚

（目録）

右詠出の輩、当座題の順をもつて其名をしるす

寄合 内藤政治郎正安

小譜請組 山下弥三郎義里

広通嫡 石野清五郎広温

御小姓組 齋藤兵庫 正明

新御番源太郎男 矢部民次郎定因

赤坂 道教寺 法住

隠侶 屋代空二 師道

広通二男 竹尾多六 元典

小普請組 森山源五郎孝盛

小十人小頭左兵衛男 上野四郎三郎資善

広通妻 勇子

御書院番
定衡妻 雅子

内藤紀伊守家
石野荒之助広高

御納戸頭
酒井己作 元福

小普請組
石野平藏 広通

新御番
谷 藏人 衛寿

以上、十七人

矢部源太郎定衡

特に親しい幕臣と広通近親、非門はいても他門は含まないという言い方は、他門混在が一般だった江戸武家歌壇の状況を示しているわけだが、成島信遍他界、磯野政武不在の冷泉門の親近感に満ちた会であったことをうかがわせる。為村からみても肌合いのよいグループだったものと推察される。

(2) 作者部類

広通は堂上派歌人であるから、二十一代集などは精読したに違いないが、その際、作者部類は必備の参考文献だったわけで、所持したものと思われるが、周知の如く伝本は異同が多く、その差は単純ではない。従ってかなり諸本に当った様子がうかがえる。

該本 (B52・70) は、二三・一×一七・一センチの袋綴三冊本。表紙は白地に藍の翌檜散文刷。上一四三丁、下七七丁、中(統部類)八七丁、計三〇七丁。序、本文共に一面九行。奥書は「寛保四年春書写之 中原広明」とある。後記の序の如く、明和、安永四の年記が見えるので、寛保四年写本に後に取得した伝本の内容を書入れ、序を増補したのか。後の写本に寛保の奥書を書き込んだものか、判然としない。なお、広明は、石野家系図には広征子で大番だ

つた忠次郎広明という人物がいるが、明和四年に没しており、序の安永の年記には矛盾する。広通が広明を名告つた証は他にないが、この奥書は広通自身の別名と考える他はない。他の徴証が出るまでそのように考えておく。

(序)

作者部類本々不同也。先年、寛保四年写置所、巻首に帝王廿二主、次に大臣四十三人載之。大納言の部、藤忠信よりしるせり。右の如く、帝王・大臣をわづかにしるし、大納言も忠信よりしるす事、心得がたし。其後、明年間、一本を得たり。帝王五十三主、次に親王六十八次に執政四十六人、次に大臣百五人あり。次に大納言の部藤国経にはしまりて、かの一本の忠信よりまへに四十八人あり、四十九人にあたりて、藤忠信なり。此本、巻首よろしく見ゆるによりて、巻のはじめにこれをとぢたし侍る也。しかるうへは、寛保写置所の、帝王廿二主、大臣四十三人はのぞくべしといへども、一本のおもむきを存ぜんためにこれをのぞかずして、たゞ朱点をかけて重代をわかつ。されば、此明和年間に得たるを、全本にやとおもふに、大納言の部、冬基より経頭まで十八人もれたり。又、其以下条々異同あり。剩、下巻のをはりに至りて、作者異儀、歌仙の事を略す。尤肝要の着省略いかゞなり。萩原宗固が本これに同じ。又、一本あり、高潔本也。はじめに季吟本のよしあり。正編、続編をあはせしるす。惣別は、寛保四年写所に似て、巻首に帝王・大臣すべてなし、大納言忠信よりしるし書す。末に至りて、続編ばかりの帝王、執政、大臣をしるす、全備せざる本也。殊に此本、またくふるきをおもはず、便覧のため、わたくしの所為歟。作者部類は元來、建武四年に元盛編集、安永四に至て四百四十年ばかり、康安二年光元増補、安永四に至て四百十五年ばかり、古今より新千載に至るを旧本とはいふ。続編は、はるかにをくれて、正保三年に祿す。安永四年に至りて百三十年ばかり也。正編続編各、別也。混ぜべからず。これによりて、寛保にうつす本、明和年聞えたる本、巻首をはじめにとぢそへたるに、此たび全編宗固が蔵本、高潔が蔵本と、もに校

合す。又、イといふもの二本ともといふものにて也。たゞし、墨書にイとあるは、かねてよりあり。今の校合は朱にてしるす。又、執政大臣の部にて、二十一代大臣名集をあはせ、其外、撰集大系図等にかうがへ、所々に広通合考今案、紫をもて書そへ侍りぬ。かつ、正編面くの名の下に、続編に出るは、紫の丸をしるし、歴覧のたよりとす。続編には、もとより旧本に出るをば分別せり、といへども、引合たる證に紫の一点をしるす。たましく旧本不見もの、紫をもつみそのよしをしるす。やうやく全備せるにちかし。なを他日をまちて撰集に引合せ、歌数をもあらため見ん事をおもふものなり。

安永四年夏

中原広通

作者部類は、別本が存在するが、流布本は右の序の叙述の如く、三段階の成立過程が想定されている。

①古今―続拾の一六集分。部類二巻

建武四年(137)七月六日 元盛(盛徳)撰。

②風雅―新千載の増補、①に合して三巻

康安二年(132)正月七日 光之撰。

③新拾・新後拾・新続古今。続作者部類。

正保三年(168)仲秋 榊原忠次撰。

二二代集全部が揃ったのは③の江戸になってからであるし、編集方針の細部は区々であったので、①②③が併さり、多種の注記が本文化する過程で、複雑に変容した伝本が種々産み出されたわけである。錯雑した混態現象の整理案は、現在なお有効で、本書校訂に参考となる。萩原宗固や小野高潔(北村季吟本所持という)からの借用など、江戸武家歌壇活動の徴証として記憶しておいてよい事柄である。

この他注目すべき点では「目録」に

沢芦集四卷

初編一、二編二、三編一 広通詠歌集

とある一冊（初編？）が先年の東京古典会に姿を見せたことである。谷山茂先生旧蔵本であった。何処かに収まったので、内容には触れない。小本であった。この編年歌集から抄出して部類、版行した私家版が「五百四十首」⁽³⁾である。以上、ほとんど部分的な資料紹介に終始したが、特に広通については、本来は、初撰本霞関集、沢芦集、五百四十首、連芦集など所在の確認できたものだけでも本文が活字化され、読まれることが望ましい。他日を期すことにしておく。

〔注〕

- (1) 広通については、「源語演説抄」翻刻と解題」（当館調査研究報告13、平成四・三）、「初撰本霞関集の本文」（当館紀要25、平成一・三）で書誌に触れている。
- (2) 平成八年、三古会に関わりながら、江戸武家歌壇の論を書いていた石野政雄氏の旧蔵書を、子息の広樹氏から国文研に入れていただいた。二三九点四〇九冊。既に整理完了し、出納可能。目録もある。
- (3) 「霞関集」古典文庫の解題で内容に触れている。

春連歌 自撰再点連歌

中原廣通

春連歌

春のよきものかきつる花の香
 花の香のよきものかきつる春
 春のよきものかきつる花の香
 花の香のよきものかきつる春
 春のよきものかきつる花の香
 花の香のよきものかきつる春
 春のよきものかきつる花の香
 花の香のよきものかきつる春
 春のよきものかきつる花の香
 花の香のよきものかきつる春

和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序
 和歌童歌抄の序

和歌童歌抄の序

和歌童歌抄の序